

# 琉球大学学術リポジトリ

聴覚障害への理解をすすめるための実践的研究 ー  
聴覚に障害を持つ児童と協力学級の児童との関わり  
を通してー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2010-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 麻紀子, Oshiro, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/17328">http://hdl.handle.net/20.500.12000/17328</a>

# 聴覚障害への理解をすすめるための実践的研究 —聴覚に障害を持つ児童と協力学級の児童との関わりを通して—

大 城 麻紀子\*

## Practical study on ways to promote understanding of the hearing impairment

—Study based on observation of interactions between a student with  
hearing impairment and the rest of students in a specially assigned class  
accepting disable students.—

Makiko OSHIRO\*

It is important for students with hearing impairment in a linguistic class to understand differences with other students without disability since they study in both linguistic class and specially assigned class accepting disable students. In addition, those students with hearing impairment need to understand the meaning and necessity of their studying in both classes.

Furthermore, students with hearing impairment are expected to interact with others more actively as teachers and students in specially assigned class accepting disable students deepen their understanding of hearing capability of students with hearing impairment.

Therefore, this study examined the importance of both students with hearing impairment to understand their disability, and promoting understanding of hearing capability of students with hearing impairment from teachers and students in a specially assigned class accepting disable students.

### はじめに

言語学級で学習している聴覚に障害のある児童は、言語学級と通常学級の双方に関わり合いながら学習するため、児童本人が自分の障害を受けとめ自分と他の児童との違いを理解することが大切である。また、両方の学級での学習の意義と必要性を児童本人が理解することも求められる。さらには、通常学級の担任および児童が、聴覚に障害のある児童の聞こえについての理解を深めることで、聴覚に障害のある児童が通常学級で活動しやすくなることが考えられる。

これまでの聴覚障害の理解に関する研究では、聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業(国立特殊教育総合研究所、2003)があり、自分の

聞こえについての学習や言語学級と通常学級との連携、通常学級での授業に関する実践的研究が報告されている。また平島(2009)は、学級担任と学級児童の難聴への理解を進めるためには、通常学級における聞こえの疑似体験学習が必要であることを指摘している。

そこで本研究では、平島(2009)の研究を参考に聴覚に障害のある児童本人が自分の障害について考える学習および通常学級での障害理解を進める学習を通して、児童自身と児童に関わる通常学級の担任および児童の聴覚障害への障害理解をすすめる実践の重要性を検証したい。

---

\* Okinawa Prefectural Okinawa School for the Deaf

## 研究の方法

### 1 研究対象

#### ① A児

先天性両側感音性難聴の5年女子。裸耳では、両耳とも100 d B以上。右耳に人工内耳を装用している。左耳は補聴器を装用していない。装用時の平均閾値は30.0dBである。語音聴力は、2009年8月検査の67-S語表を用いて肉声で示した検査による単音弁別正答率90%、単語弁別正答率92%である。人工内耳の装用状態は良好で、日常生活は話声での会話が可能である。明るく活発で、わからないことは周りの児童に確認して行動する。1対1や少人数での会話の聞き取りは良好であるが、集団活動や騒音下では聞き取りが難しいので、周りの児童の活動を参考に勘で行動することがよく見られる。

また、2009年8月検査の読書力検査の結果は3年3学期以下、絵画語彙発達検査の結果は7歳8ヶ月であった。教科学習は学年相応の内容で、国語、算数、社会は、言語学級で学習し、それ以外の学習は通常学級で学習している。学習言語の習得には遅れが見られるため、学習中には視覚的な手がかりや学習用語の補足説明が必要な場面が多く見られる。

高学年になって、自分と他の児童との違いを少しずつ意識するようになってきているので、発音が不明瞭で言いたいことが伝わらない時は、話すのをあきらめる場面がしばしば見られるようになってきた。さらには、一斉指導時で教師の説明がわからない時には、学習意欲が下がる場面も見られる。

#### ② 通常学級の児童33名

通常学級の児童は、A児とは1年生の時から一緒に活動している児童が多数いるので、A児が難聴であることを知っている。A児の座席は、通常学級担任の配慮により中央付近の2番目で、普段の学習や活動の時には周りの児童の様子を見ながら活動できる状況である。また学級には、A児が信頼し頼れる児童が数名おり、普段はその児童たちの支援を受けながら活動している。しかし、学級の児童は、A児が人工内耳を装用していて日常会話や活動が可能な場面が見られることから、健聴児と同じように関わる場面が多々見られることから、A児の聞こえの状態や実際に困っていることを正確には把握できていないことが考えられる。

### 2 実践期間

平成21年4月～平成21年12月

### 3 手続き

実践は、特別支援学校学習指導要領(文部科学省、2009)の自立活動6つの区分のうち、特に「心理的な安定」「人間関係の形成」に着目して学習を行った。聴覚に障害のある児童本人が自分の障害について考える学習は、言語学級での自立活動の時間に年間計画を立てて、7時間行った。学習内容は、自立活動関連区分の「心理的な安定」から「情緒の安定に関すること」「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること」、「人間関係の形成」から「自己の理解と行動の調整に関すること」に着目し、「なぜ両方の学級で学習しているのか?」、「耳のしくみと自分の聞こえについて知る」、「自分についてのアンケートを通しての自分理解の学習」、「ろう学校との交流」の4項目である。学習後、ワークシートや日記で学習内容の振り返りを行った。

通常学級での障害理解を進める学習は、通常学級で道徳の時間に2時間行った。学習内容は、「補聴器と人工内耳の聞こえについて知る」、「難聴の疑似体験学習」の2項目である。学習後、ワークシートで学習内容の振り返りを行った。

実践を行うにあたって、児童の保護者に対して十分な説明を行い、同意を得、実践が終わるたびに実践での児童の様子や実践内容を口頭や連絡ノートを通して報告した。

## 研究の結果

### 1. 聴覚に障害のある児童本人が自分の障害について考える学習

#### (1) なぜ両方の学級で学習しているのか?

##### ① 学習のねらい

なぜ両方の学級で学習しているのかを教師と対話形式で話し合い、言語学級で学習する意義について理解する。

##### ② 授業の様子

A児は、言語学級ではじめて自分で電池チェッカーを使ったと話し、積極的にチェックしていた。メンテナンスボックスの中身(図1)にも興味を持ち、一つひとつ使用用途や使い方を教師にたずねていた。両方の教室での学習については、1年生の時から双方の教室で学習しているので、双方の教室を行き来するのはあたりまえだから「どうして?」と理由について考えたことがなかったと話していた。時々、自分の都合で言語学級に来たり、言語学級の時間なのに通常学級で学習しようとしたりすることについては、嫌な事があったり、先生に怒られたりすると

もう一つの教室に行きたくなったからと述べていた。そこで、2つの教室で学習する理由について教師の考えを話してA児に理解を求めた。そしてA児が自分の感情から居場所を求める時には、言語学級と通常学級の双方の教師に確認を取ってから教室を移動することを約束した。

授業終了後、通常学級の担任と保護者にも授業の内容を伝え協力を依頼した。特に家庭では、同じ話題を再度保護者からA児に伝えてもらった。保護者とは、必要に応じて同様の話題を学校と家庭で繰り返しA児に話すことを確認した。

授業後、A児は、事前に学習場所を言語学級、通常学級双方の担任に確認し、自分の都合で学習場所を変更することは次第に少なくなっている。

- ・ 電池チェッカー
- ・ 替えの電池
- ・ ステッドスコープ
- ・ 脱脂綿      ・ 補聴器カバー
- ・ 細めの綿棒
- ・ 薄めたアルコール液

図1 メンテナンスボックスの中身

(2) 耳のしくみと自分の聞こえについて知る。

① 学習のねらい

耳のしくみと人工内耳の働きについて知るとともに、人工内耳をしていて、気をつけることを知る。

② 授業の様子

A児は、耳のしくみについてパソコンを使いアニメーションで見たので、興味関心を持って授業に参加していた。

教師が人工内耳について話し始めると、A児は自分から手術で病院に入院している時の様子や音入れの時に聞こえてきた音について話した。入院中は、不安と期待が入り混じって変な気持ちだったと述べ、人工内耳を大切にするために普段気をつけて欲しいことを話すと、わかっていると言い、人工内耳は自分にとって大切なもので人工内耳が聞こえないと困ると述べていた。

(3) 自分についてのアンケートを通しての自分理解の学習

学習で使用したアンケートは、ろう学校高等部生徒のアイデンティティ発達支援プログラム(甲斐、鳥越、2007)を参考に項目を作成した。

① 学習のねらい

アンケートを通して、自己理解を深める。

② 授業の様子

保護者には、年度初めよりA児の障害に対する理解を促すための授業を年間通して行っていくことを伝えていたので、保護者はアンケート実施を快く了承した。また、これまでのA児の聞こえについての学習内容を保護者に伝えていたので、保護者が授業の内容を家庭でA児に確認したり、電話や連絡帳を通して教師に自分の思いや考えを伝えたりと、アンケートの実施にあたり保護者の協力が得られる環境ができていた。

A児は、幼児期にろう学校に在籍していたことを思い出しながらアンケートに回答していた。自分が聞こえないと自覚した時はまわりの友だちや両親、姉妹と自分は違うと思いきょくだったと述べ、先生の話や友だちとのしゃべりで聞こえなくて困ったことなどを率直に話し、自分の聞こえについての質問にも戸惑いや抵抗は見られなかった。アンケートの項目の「これからどんなコミュニケーションの方法ができるようになりたいか?」に対して、口話も手話も指文字も筆談も全部できるようになりたいと話した。その理由を尋ねると、全部自分には必要だからと述べていた。

A児の回答から、児童が聞こえる集団と聞こえない集団のどちらにも関わっていききたい気持ちが伝わってきた。

(4) ろう学校との交流

① 学習のねらい

同じ障害を持つ児童との交流を深める。

② 授業の様子

5年ぶりに訪れたろう学校だったので、A児はなつかしように校内を見ていた。幼稚部の時に一緒に学習した児童にも再会できてうれしいと話していた。A児は、交流会のオリエンテーションもプールでの交流も自分からチームを探して入っていくなど積極的に関わろうとする様子が見られた。おやつタイムの時にろう学校の5年生と自己紹介し合った。筆者が今年度中にろう学校で一緒に交流学習することを伝えると、また遊ぼうと自分から声をかけ握手していた。

2 通常学級での障害理解を進める学習

(1) 補聴器と人工内耳の聞こえについて知る。

① 学習のねらい

聴覚に障害のある人の聞こえを疑似体験することで、聴覚に障害のある人のことを理解する。

## ② 授業の様子

通常学級で授業することを聞いてA児は、はじめ不安そうな顔をしていた。学習中に友達の感じたことを聞いたり、聞こえにくいのがんばって聞いているんだねと声をかけられたりすることで、次第に表情が明るくなっていった。授業が終わった後、言語学級に戻るとA児は、みんながちょっと優しくなった気がした。恥ずかしかったけど、ちょっとうれしかったと話していた。

通常学級の児童は、はじめて補聴器の音を聞いたり、補聴器や人工内耳での聞こえの疑似体験したりすることに興味を持って取り組んでいた。授業中、通常学級の児童は自分の想像していた聞こえ方とは違うことに気づき、「自分が難聴になったら、補聴器をずっとかけていられるかな？」や「雑音があって聞きづらい。」などのつぶやきが教室のあちこちから聞こえてきた。

## ③ ワークシートの児童の記述

児童の回答の中で○は通常学級の児童の記述を表し、●は聴覚に障害のある児童の記述を表している。授業前に自分が聞こえなくなった時の気持ちを質問すると児童の回答では、表1のように、聞こえなくなることに對する不安と恐れなどの感情の回答が大半であった。A児は、日ごろ自分が思っていることを素直に書いていた。

表1 ワークシート回答例1

もし、聞こえなくなったら、どんな気持ちになりますか？(授業前)

- いやなことは聞こえなくてもいいけど、大事なことは聞こえなかったら困る。
- 自分だけ他の人と違うのかと思う。
- パニックになり、悲しい。
- ととても不安になり、さびしい。
- どうしたらいいかわからなくなる。
- こわい。
- 不便になると思う。
- みんなに迷惑をかける。学校が楽しくなくなる。
- わからない。
- 早くしゃべっている人がいると困る。わからなくて悲しい気持ちになる。

実際に補聴器の音を聞いた児童たちは、補聴器の

雑音に顔をしかめ、不快な表情をしていた。A児は、日ごろと何が違うのかと筆者に聞き、回りの児童の反応を不思議がりながら自分の意見を書いていた。児童の回答は、表2に示すとおりである。

表2 ワークシート回答例2

補聴器の音を聞いて、どう思いますか？

- 声が高い。
- ざわざわいろんな音がしてうるさい。
- キーンとして耳が痛くなる。
- 人の声たくさん聞こえてうるさい。
- Aさんは、毎日これをかけているのかと思いました。
- なんでもない音がひびいて聞こえた。
- いつもより大きな音になって、耳が痛かった。
- 人の声が一斉に聞こえた。
- うるさくて、何の音か全然わからなかった。はずしてもしばらくボーっとなった。
- みんなの声が混じって、聞きたい声が聞こえづらい。
- 雑音が多かった。
- ふつう。いつもと同じ

補聴器の音や聞こえの疑似体験の後で、難聴になるとどんな時困るかを児童に質問すると表3の通りであった。

表3 ワークシート回答例3

もし、聞こえなくなったら、どんな時に困りますか？

- 会話。おしゃべりするとき。
- 話を聞くとき。
- 会社で困る。
- 勉強をする時
- いつも困る。
- 電話をする時。
- 友達同士で話しているとき。
- 大事な話を聞くとき。
- おしゃべりする時。みんなと勉強する時。朝会の時。

授業終了後に授業前に質問した自分が聞こえなくなった時の気持ちについて再度質問した。児童の回答は表4に示すとおりであるが、通常学級の児童の回答に不安や不快な感情に加えて実際に補聴器を装用した時に自分が困ると思われる内容や感情の記述

が多く見られた。A児の回答は、授業前と同様であった。

表4 ワークシート回答例4

---

もし、聞こえなくなったら、どんな気持ちになりますか？(授業後)

---

○やっぱり困る。  
 ○わかる言葉はわかるけど、聞いた事のない言葉はわからない。  
 ○人の話はあんまり聞こえないんだと思った。  
 ○自分だけ他人と違うと思った。  
 ○パニックになる。  
 ○授業の時、大変だと思った。  
 ○とてもこわい気持ちになる。  
 ○悲しい。さびしい。  
 ○おしゃべりする時困る。  
 ○普通に聞きたい。みんなと同じように聞きたい。  
 ○いやになる。  
 ○補聴器を毎日ずっとつけていられるか不安になった。  
 ○言葉が伝わらなくなる。困る。  
 ●早くしゃべっている人がいると困る。わからなくて悲しい気持ちになる。ゆっくりしゃべってほしい。

---

(2) 難聴の疑似体験学習

① 学習のねらい

ア) A児

困っている時、まわりに自分の状況をわかってもらうにはどうしたらいいかを考える。

イ) 通常学級の児童

難聴の子がどんなことで困っているのかを知るとともに、難聴の子が聞きやすい環境にするための工夫について考える。そして、難聴の子が困っている時に、どんな支援をしたらいいかを考える。

② 授業の様子

聞こえにくい児童を各グループに一人配置して、聞こえる児童と聞こえない児童でグループを作って学習した。それぞれのグループで聞こえにくい児童の困り感を共有し、どんな支援をすればいいのかを体験を通して学習した。

難聴を疑似体験した児童は、ヘッドホン装着中周りの様子をうかがう場面が多く見られた。それから指示が伝わっていないと感じると周りの児童に助けを求める場面もみられた。難聴役の児童以外の児童

は、グループ内の難聴役の児童にどのように支援したらいいかを意識し、筆者や難聴役の児童に支援の内容を確認する場面が何度か見られた。

③ ワークシートの児童の記述

児童の回答の中で○は、聞こえる児童役、●は、聞こえにくい児童役の記述を表している。

疑似体験後に難聴の人への具体的な支援について質問した。児童の回答は表5に示すとおりである。

表5 ワークシート回答例5

---

疑似体験をして、難聴の人はどんなサポートがあると嬉しいと思いますか？

---

○聞こえない人は、絵や文字、図など、目に見える手がかりを使うとわかりやすいんだと思った。  
 ○手を使って教えたり、ジェスチャーをして教えるといいと思う。  
 ○話の内容を教える。  
 ○△△するんだよとかいってあげたらいいと思う。  
 ○困っている時、教えてあげたらいいと思う。  
 ○必要なことを紙に書いてあげる。  
 ○ゆっくり、大きな口で話す。  
 ●サポートがあると、物事がわかって安心した。  
 ●みんなと同じようにできてホッとした。  
 ●サポートがあつてうれしかった。  
 ●サポートがない時は、とても不安だったけど、あると助かった。

---

授業後の感想では、A児が学習中や友だち同士の会話中に困る場面では、積極的にサポートしたいとの回答が女子に多く見られた。男子は、短い文章での記述が多かったが、いずれもA児を支援することに肯定的な回答が目立った。またA児は、通常学級の児童が難聴について知ったり、難聴である自分のことを考えたりしたことをうれしいと語った。

それから通常学級の担任は、A児がいたから学級の児童全員が聴覚障害について知ることができ、難聴児への支援について考える学習ができたと述べていた。児童の感想は表6に示すとおりである。

表6 ワークシート回答例6

---

学習を終えての感想を書いてください。

---

○難聴の学習をして、私が思っていた以上に難聴の人が普通に生活することは大変な事だと分かりました。難聴の人は、周りの皆が何を

しているのか、何を言っているのかわからないと不安で困ってしまいます。だから、周りの人のサポートや心くばりがあると、すごく助かります。私もジェスチャーや出来るだけゆっくり口を大きく開けて話そうと思いました。それから、難聴のひとはほちよう器を付けても、周りがうるさいと授業の時など先生の話がちゃんと聞こえなくなるので、難聴の人が少しでもよく聞こえる為におしゃべりや私語を慎まないといけないと思います。

- 難聴の人の事がいろいろとわかってとてもよかったです。私は、難聴の人の事が知りたいと思っていました。そして、5年生になってHさんと同じクラスになり、聞きづらいことなどぜんぜん知らなくて普通に話していました。そんな時、ことばの先生が難聴の人の事を話してくれました。私は、授業の前は難聴という言葉さえ知りませんでした。人工内耳の聞こえ方を聞いて、想像していたのとは大違いだと思いました。ロボットみたいだと思いました。私は、Aさんの聞こえ方がわかってよかったです。難聴の人の聞こえ方を知ることができたのは、Aさんがいたからだと思えません。Aさんと一緒のクラスでよかったです。私は、今まで以上にAさんにやさしく、ていねいに伝えられるようにしていきたいと思います。
- 難聴の人はいろいろ「大変なんだな」と思いました。Aさんが「わからないな」という顔をしていたら助けるぞ。
- 耳の不自由な人の役に立てるようにがんばりたいです。
- 友だちのKくんが聞こえなくなると、自分もKくんも困ると思う。
- 補聴器をしている人は、勉強の時に困ることがあるということがわかった。
- 聞こえの勉強をして、聞こえない人は大変だ、かわいそうだと思いました。
- とても為になったと思う。
- 聞こえない人は、サポートがないと困ると思った。聞こえない人の事がいろいろわかりました。
- 聞こえない人がこんなふうにかんがえているとは知りませんでした。授業できてうれしいです。
- 自分のことをみんなが勉強しているのを見て

恥ずかしかつたけど、勉強のあとみんながいろいろ話してくれるのでうれしかったです。

## 考察

### 1. 聴覚に障害のある児童本人が自分の障害について考える学習

本学習を通して、A児は自分の耳と聞こえに関心を持つようになってきている。

A児は、自分が聞こえないと自覚したのは、小学校になってからだと話した。姉や妹とは違って自分だけろう学校に通っていたこと、その当時の写真や保護者の話を聞いて、なぜ自分だけ違っていたのかを不思議に思ったこと、人工内耳の手術をする時のことなど、自分の聞こえに関するエピソードを話すことが多くなった。また、同じ言語学級の児童の聞こえについてたずねる事もしばしばあり、児童らの聞こえの状態を詳しく知りたがった。

それから、人工内耳の調整や定期診断で病院へ行った後は、必ず調整や診察の様子を話し、筆者が病院と関わることを喜んだ。言語学習の内容確認で筆者が病院のSTと連絡をとっていると知ると、担当医ともぜひ会って欲しいと話した。

また筆者が日ごろからA児の正確な書字力を身につけるために手話や指文字を使用していることもあり、A児は、学習中に伝わりにくい場面で手話や指文字を使うことが自然になっている。そのため、アンケートの質問の「今後習得したいコミュニケーション手段」として、特に手話を強調し、今後は、聞こえない友だちと話したいから手話も覚えたいと述べていた。

しかし、通常学級や全体集会の場など、集団場面で筆者が周囲にわかる状況で支援することには抵抗を示すことが依然見られ、集団場面での情報保障には課題が残されている。

学習の機会ごとに保護者に学習の内容を伝え、保護者の意向も組み入れながら学習を進めてきたので、本学習では、家庭での支援は大きな役割を果たしている。

普段のA児の様子から、日ごろから保護者が児童の聞こえについてきちんと伝えていた様子が伺えた。保護者が本実践に対して理解を示し、協力する体制が整っていることが実践の成果を導いていることが考えられる。

## 2. 通常学級での障害理解を進める学習

本実践では、通常学級の担任は、聴覚に障害のある児童の聞こえや学習上の配慮点や具体的な支援の方法を学べたことは良かったと話していた。そして、聴覚に障害のある児童が学級にいて、他の児童が聴覚に障害のある人の聞こえや困っていること、協力できることを学べたのも良かったと述べていた。また通常学級の児童のワークシートの記述では、聴覚に障害のある人の聞こえや困り感、自分たちが協力できることを実体験として学習できたことを評価する記述が多く見られた。聴覚に障害のある児童は、通常学級の児童が自分の聞こえについて考えたり、聞こえにくい時に助けたりすることがうれしいと話し、以前より聞こえにくい時に助けてくれる人が増えたと述べていた。

しかし、この学習だけで児童が通常学級で自分の居場所を確立できているとはいえない。これからも聴覚に障害のある児童と通常学級の担任や児童との関わりを多く持つことが重要である。さらには、言語学級の担任が通常学級との関わりを積極的に持つことも求められる。そして、本実践のような聞こえの学習は、単発で終わることなく、児童の発達に合わせて今後も継続して行うことが必要である。

## 付 記

本研究を進めるにあたって、ご協力頂きました福岡市立博多小学校言語学級の平島ユイ子氏、沖縄県難聴言語障害教育研究会の方々に深謝いたします。皆様の今後のご発展を心より祈念いたします。

## 引用文献

- 1) 国立特殊教育総合研究所(2003)聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業
- 2) 平島ユイ子(2009)学級担任と学級児童の難聴への理解を進めるために
- 3) 文部科学省(2009)特別支援学校学習指導要領 自立活動編
- 4) 甲斐更紗,鳥越隆士(2007)ろう学校高等部生徒のアイデンティティ発達支援プログラム 特殊教育研究 45,3